
ヘルプデスク

イツミン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヘルプデスク

【コード】

N0559J

【作者名】

イシミン

【あらすじ】

ビルの上自殺志願者。そのとき届いた電話のベル。ヘルプデスクは動き出す。

ジリリリリリリリ!

けたたましく、電話のベルがなった。また仕事の電話だろう。まったく、面倒臭いもんだ。

大体、今更黒電話も何もない。ここは昭和記念館じゃないんだぜ？

ここは………。

*

空の色は真っ青なのに、何故こんなにも心はどんよりと曇ってるのだろう？

フェンスに手を添えて、私は外を覗く。

高層ビルの屋上つて場所は、名前だけあってやっぱり高い。それはもう、「高層」なんだと思い知らされる。

私は空を見上げた。

真っ青な空。

空がこんなにも綺麗だから、これからやることが後ろめたくて、私の心は曇るのだろう。

素足の私の後ろには、靴が揃えて、ちょこんと置いてある。

この状況を見れば、もうわかるでしょう？

そう、自殺。

私は自殺をするのだ。

高層ビルから人知れず飛び降りて、人ごみの中で絶命するのだ。

誰か知らない人を巻き込むかもしれない。

でも別に、そんなことがまわらない。

私は、私が死ななきゃいけないことになったことに、正直ムカついているのだ。

私だって死ぬんだし、最期くらい当り散らしたってかまわないですよ？

スーツの内ポケットから封筒を取り出し、片方の靴の中に入れる。

当然ながらそれは遺書だ。死ぬんだからって思って、昨日あわてて書いた。ビジネス街の一等地で自殺となれば、明日の新聞の一面は、多分独り占め。

なんて記事で載るんだろう？

「この世を憐んだ〇し、自社屋上から投身、とかかな？フッフ」

ボソッと呟いて、私は一人笑った。

この世を憐んで？

そんなの、一番遠い。

でもどうせ、私の内情を理解しないまま、記者は美談をさがすのだから。

空は青いのに私の心は曇っていて、社会は曇りガラスの向こう側。

真実なんて見えてこないのだ。

「いい天気だな」

唐突に、後ろから声がした。

振り向くと、遊び人みたいな風体の男が空を見上げ、煙草をふかしている。

「誰？」

私は思わず聞いた。

屋上は立ち入り禁止で、いつも鍵がかかっている。

誰も来れるはずはなく、私が出来たときも、誰もいなかった。私が屋上に来れたのは、守衛室から鍵を拝借して合鍵を作ったからだ。

男は守衛室から来たのだろうか？

どう見ても、マトモな職業についてとは思えない格好をしているのだけれど……。

「まあ、誰だ、とかはどうでもいい。ヘルプデスクに電話があつてな、それで来た」

男は頭をかき、煙草を捨てて踏み消した。このビルは禁煙だけど、屋上もそうだろうか？

「自殺だろうか？アンタみたいなのが居ると、俺に電話が来るんだ。正直、迷惑なんだがな」

「ヘルプデスクって……社の人？」

私は恐る恐る聞いた。

ヘルプデスクはうちの会社にもある。

面倒ごとを処理する部署は、大きな会社ならどこでもあるものだ。

そこに「屋上に自殺希望者が居るぞ」と電話があつたのだろうか？

「いいや、あんたの会社には関係ない。だが気にするな、これは俺の仕事だ」

男は訳のわからないことを言う。

「つまり……」

言って、男は私に近寄り、そろえられた靴から「遺書」を取り上げた。

「俺は自殺を止めに来た……そう言えばわかるか？」

遺書をムリヤリ私のスーツのポケットにねじ込み、男は言う。

そんなことされたくない。

私は自殺するために、この日を迎えたのだ。

6月8日。

結婚まで考えた男の誕生日。

こっ酷く私を振った男の誕生日だ。

ちなみに今日この日、このビルの一階のカフェで、二股かけてた女に結婚を申し込むのだと言っていた。

自分の誕生日にプロポーズ？どんなナルシストだ、バカヤロー。

きつと「誕生日プレゼントに君をくれないか」とか言つに違いない。
キモチワルイ。

そつだ、いつそのこと、アイツが私の下敷きになればいい。アイツを殺せるなら、死ぬ甲斐もある。

「私はこの日のために生きてたのよ……」

「だから、それをやめると言っている」

思いのたけを吐き出そうとして、男はそれを言葉で制した。

私は思わず口ごもる。

「クソみたいな男に騙されて、復讐のために死んで満足か？ そうしなきゃ、復讐できないのか？」

男の言葉に、私は両手を握り締めた。

他に何が出来るっていいのか。

相手は一大企業の社長の一人息子。

女一人が何をして、結局全部揉み消されて、そして私は損をすることになるだろう。

社内に「二股かけて女を捨てた」と噂を流しても、そんな事実はないかとされて、結局私は男からも会社からも捨てられるのだ。

なかったことにされたくないから、私は死んで我を通す。

「他に何が出来るの？ あなたが何を……」

何を知っているっていうの？そう言おうとして、私は言葉に詰まった。

この男、私が自殺する理由を、たった今さっき口にしなかったか？

適当に口裏を合わせるだけで、出てくるような言葉では、到底ない。

この男は、何で知ってるんだろう？

自殺をしようとしてることも、それに至る経緯も、この男は全部知っている。

何故だろう？

「あなた・・・なんで全部知ってるの？」

たずねると男は小さく笑い、

「言ったら、ヘルプデスクからきたんだ」

そして言った。

ヘルプデスク。

どこのヘルプデスク？

そう思ったとき、男はポンと、私の肩を叩いた。

「人間社会の・・・かな？」

頭の中の質問に答え、男は笑う。

全部見透かされている。

「じゃあ、アナタは私を助けてくれるの・・・？」

ぼんやりと、私は聞いた。

人間社会のヘルプデスクなら、それで私の元に来たのなら、ならば助けてくれるのだろうか？

「当然そのために来たんだ」

「何をしてくれるの？アイツを殺してくれるとか？」

男の返答に、私は勢い込んで聞いた。復讐の代行というなら、それ位してくれるかもしれない。

「いやいや、そんなことはしない。それだとアンタが死ぬのと一緒に死ぬ」

苦笑いで男は言った。

それなら、何をしてくれるのか？

こっ酷く振られたんだから、こっ酷い仕返しをして貰わないと割に合わない。

「ヤツは今、下のカフェに入ったな」

腕時計を見て、男は頷く。

私も携帯電話を取り出して時間を見る。正午過ぎ。昼休みに入った頃だ。

「今は客でこつた返してるだろうな、店は」

男は一人でうんうんと頷く。

助けると言っておいて、男は何もしてくれない。

どのためのヘルプデスクなの？

「一体何をしてくれるのよ？」

私は男に詰め寄った。

男はただ笑って、そして言う。

「いや、アンタがするんだよ」

……は？

「助けてくれるって言ったじゃない！」

人の自殺を止めておいて、何もせずに「アンタがやれ」。そんな才子とは想像していなかった。

腹立ち紛れに、私は男を怒鳴り散らす。

「いやいや、俺が何したってアンタはすっかりしない。アンタがすっかりするには……」

一度言葉を区切り、男は握りこぶしを持ち上げて、力を込めた。

「コレが一番だろ？ 殴ってやればいいんだ、あんた自身が」

そして続けて男は言った。

殴ってやる。

たしかに、私にはそれが一番すっきりすることだろう。

私はどうしようもなく行動派で、振られた男は全員殴ってきた。

頭に来ると、口より手が出ちゃう女なのだ。

けど……。

「それができないから、死ぬんじゃない」

小さく、私は呟く。

「うちの会社、大きいの。社長のバカ息子殴ったら、タダじゃすまないわ。もう既に脅されてるのよ、息子に何かしたら、一族を路頭に迷わせるぞ、って」

苦虫を噛み潰した顔っていうのは、一体どついう顔を言うのだろうか？今の私の顔を鏡に映したら、きつとそれに近いのではないだろうか？

悔しかった。

私は悔しかった。

だから死んでやるのだ。

自社ビルで自殺が起きれば、会社イメージは転落だ。それを望んで私は死ぬのだ。

言う言葉があるのならば「クソクラエ」なのである。

「バカ息子ぐらい、思い切り殴ってやれよ。大丈夫、アンタはどうにもならないさ」

男はやけに自信満々に言い切り、そして、

「言ったろ、ヘルプデスクから来たんだ」

もう一度その言葉を言った。

「ヘルプデスクは全部フォローする。公衆の面前でバカをぶん殴って、今日は家に帰れ。そうすれば、いつも通りの明日が待ってるさ」

男は自信満々で、声には揺るぎがない。

ヘルプデスクとは、どれほど力を持つてるのだろうか？

だけれど、不思議とその言葉は受け入れられた。

男が私を全て見透かしてるからなのか、男が自信たっぷりだからなのか、理由はわからない。だけれど、私は「何をしても大丈夫」な気がしてきた。

殴ってやれ。

殴ってやれ！！

心の中で、自殺に向けていたフラストレーションが暴力衝動に傾いていく。

殴ってやれ！

ようし、殴ってやろう！

馬鹿な女の、一世一代の見せ場だ！

カフェは人でいっぱいだった。

おあつらえ向きだと、私は思う。

「お客様、ただいま満席です」

席待ちの人間を置き去りにして店に入ると、店員が駆けつけて言っ

た。

私は無視をする。

探す必要もなく、アイツはすぐに見つかった。

店の真ん中の、視線の集まる席に座っている。そんなに目立ちたいのか、バカヤロー。

アイツの前には、バラの花束と指輪を渡されて、目を潤ませる女性
が。

大和撫子という形容がぴったりなの、私とは正反対の可愛らしい女の子だ。年齢だって、随分若いようだ。ひよっとして新入社員か？

女子高生に手を出す変態親父かよ、全く。

私になびかないのも当然だわね。

ツカツカと、私はアイツに近づく。

「ん？君は・・・？」

私に気付いたらしく、バカ息子は顔を上げる。

私にはつこりと笑って、陰で拳を固めた。

死を覚悟した女の一撃、ラクなもんだと思うなよ？

胸中で告げて、私は拳を振りあげる。

「何を……」

するんだ、って？

遅い遅い。

口で言う前に体を動かさない、文科系が。

でないとー

ゴン

ほら、避け切れなかった。

ガシャーンと大きな音を立て、バカ息子は椅子とテーブルを巻き込んで倒れる。殴った音が地味だったからか、その後の破壊音がやけに耳に付いた。

バカ息子は目を白黒させて私を見た。

私は大和撫子を一瞥する。

大和撫子は体を一瞬硬くした。ううん、あなたは悪くないのよ、こ

めんなさいね。胸中で一言詫びて、私の視線は再びバカ息子に。

「他に何人いるのかしらね？」

大きな声で言つて、私はカフェを出す。

これだけのことをしでかしたというのに、誰も私を咎めない。堂々としてると、誰も何も出来ないのかしら？

背後では、大和撫子がアイツに食って掛かる声が聞こえてくる。

ははあ、時にはやるもんね、大和撫子も。

晴天の下に出て、私は空を見上げる。

真っ青な空。澄んだ色。私の心は、今や同じ色だ。

なんとスッキリしたもんか！

翌朝。

新聞を見て私は驚いた。

白昼の暴行、犯人は行方知れず

地方面の片隅の、小さな小さな記事。

私が起こした事件だ。なのに、容疑者は不明で、逃亡したまま捕まらないのだそうだ。

私はここにいるのだけれど。

社に出れば、昨日私は会社に居なかったことになっているらしく、無断欠勤を怒られた。

そして噂によれば、結婚話のご破談になったようだ。

ザマーミロ、である。

一族は路頭に迷うこともなく・・・。

私は仕事用のパソコンに届いていたメールを開いた。

件名も差出人も書いてないありえないメールで、ただ、

「ぜひともこのことは内密に。」

ヘルプデスク」

とだけ書いてあった。

たいしたもんだ、ヘルプデスク！

*

ジリリリリリリリリ!

けたたましく、電話のベルがなった。また仕事の電話だろう。まったく、面倒臭いもんだ。

大体、今更黒電話も何もない。

ここは昭和記念館じゃないんだぜ？

ここは……ヘルプデスクだ。

(後書き)

こんなんあつたらオモロいなー

って話

って感じ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0559j/>

ヘルプデスク

2011年1月25日05時50分発行